

『計量国語学』アーカイブ

ID	KK300407
種別	追悼
タイトル	偉大な“linguist”宮島達夫先生を偲ぶ
Title	Reminiscences of the Great "Linguist" Professor Tatuō Miyazima
著者	石井 正彦
Author	ISHII Masahiko
掲載号	30巻4号
発行日	2016年3月20日
開始ページ	237
終了ページ	239
著作権者	計量国語学会

追悼

偉大な“linguist” 宮島達夫先生を偲ぶ

石井 正彦 (大阪大学)

宮島達夫先生は、1959 年から 32 年間、国立国語研究所にお勤めになり、91 年 10 月に大阪大学に転じられました。大阪大学では、ご定年までの 3 年半、文学部現代日本語学講座でおもに語彙論分野の研究教育と学生指導を担当されました。私は、宮島先生が阪大に移られる前の 8 年ほどを国語研究所でご一緒し、また、先生のご定年後は（しばらく間はあきますが）その後任として阪大に転じ、同じ語彙論分野を担当しているという御縁もあって、ここに、僣越ながら先生を偲ぶ機会をいただいたものと思います。

私などが申すまでもないことですが、宮島先生はまさに偉大な言語学者 = linguist でした。上に「語彙論分野」と書きましたが、先生のお仕事は、それにとどまるものではありません。試みに、国語研究所の「日本語研究・日本語教育文献データベース」で先生の単著・筆頭著者論文を検索し、得られた 115 編の論文（資料と書評・紹介の 16 編を除く）の「分野」を（複数ある場合は先頭の分野名で）集計したところ、なんと同データベースが設定する 15 の分野すべてにわたっていたのです。先生のご関心が語彙論にとどまらず言語研究のほとんどの分野に及んでいることが改めてよくわかります。先生のお仕事は、これらさまざまな分野の、それぞれの研究史に深く刻まれることでしょう。

もちろん、語彙の研究が先生のご関心の中核にあったことは間違いありません。先生は、大著『語彙論研究』の「あとがき」に、

わたしのおもな研究の場は、2 つあった。1 つは奥田靖雄氏を指導者とする言語学研究会・教科研（教育科学研究会）国語部会で、ここでは、言語についての基本的な考え方と、おおくの実例による研究法とをまなんだ。もう 1 つは、国立国語研究所であり、林大氏や水谷静夫氏のもとで大規模な語彙調査に参加したおかげで、統計的な方法をまなぶことができた。

と書かれています。いわゆる実例主義にもとづく微視的な記述的研究と、統計的な手法にもとづく巨視的な計量的研究は、先生の語彙研究の両輪でした。『動詞の意味・用法の記述的研究』『雑誌用語の変遷』『専門語の諸問題』や『古典対照語い表』『分類語彙表増補改訂版』などのお仕事、そして、「語いの類似度」をはじめとする数多くのご論考では、どれもこの両輪がそれぞれにバランスよく回っています。先生はよく「現代語の研究を確立したことは、国語研究所の最大の功績と言ってよい」とおっしゃっていましたが、先生は間違いなくその立役者の一人であり、現代語の語彙論・語彙研究は先生によって確立されたのだと思います。

語彙調査についていえば、国語研究所の創立 50 周年（1998 年）に、OB の林四郎、水谷静夫、宮島達夫、田中章夫の各氏と現役の中野洋氏による記念座談会が催されたことは、

意義深いことでした。私も形ばかりの司会者として参加しましたが、実質的に会をつかさどったのは宮島先生でした。たとえば、次のような具合です。

宮島：僕、ちょっと水谷さんに聞きたいことがあるんだけども、語彙調査ってのはね、やっぱり日本で計量言語学を発達させる非常に大きなファクターになったと思うんですよ。計量国語学会なんていうのができたのも、まあ、これがかなり大きな要因になってるだろうと思うしね。ということは、つまり水谷さんが国語研究所へ入ってこういう統計的な調査を始めたのがね、かなり大きいだろうと思うんですけども。水谷さんは卒業論文ってのは、全然関係ない「古事記」かなんかやったんですよ。いったいどこでどうして統計的なものに興味をもったというか、(略)そこらを知りたい。

水谷：それはね、卒業論文なんてのは全く忘れていたよ。そんなもの書いて、あったことをね。だけど、卒業論文の中でね、統計的な手法を、今から見たら笑いものにしかならないんだけど、いくつかやっぱりね、例数勘定してね、検定論の真似事やっていますよ。だから、そういう意味ではね、大学ん時からね、……

宮島：そのケはあった？

水谷：うん、ある種の検定論の本は読んでたわけ。

宮島：なるほど。

宮島先生は、これも多くの方がご存じのように、語学にたいへん堪能な方でした。つまり、言語の使い手・達人としての *linguist* でもあったわけです。私が知る限り、英語のほか、ドイツ語、中国語、ロシア語、フランス語を、読み書きはもちろん、流暢にお話しになったと思います。あるとき「最も得意な外国語は？」とお尋ねしたところ、「やっぱり、ドイツ語かなあ」というお答えでした。驚くべきことに、先生はそうした語学力を維持しようとして勉強されていました。西が丘の国研時代、先生は赤羽駅から研究所まで歩いて通勤されていましたが、いつも語学のテープをイヤホンで聞いていらっしゃいました。研究所に外国人研究者が来訪ないし滞在されると、たびたびつかまえてその方の言語で会話されていました。あるときは、中国出張が近いからと言って、水道橋の北京亭という中華料理店に出向き、中国人の主人と会話の練習をされたということもありました。先生の、スケールの大きな対照語彙論研究は、こうした努力の上になされていたのだと思います。

最後に、先生が25歳にして著された『ことばの発展』から、私の最も好きな一節をご紹介します。先生のお人柄を偲びたいと思います。

夏のはじめごろ、汽車のまどから、どこまでもつづく田んぼをながめっていると、この何千万本とも数しれないイネのなえが、いちいち人間の手でうえられたのか、とふと気がついておどろくことがあります。また、たかいところに立って、ちいसानな屋根・屋根・屋根がずっとつづいているのを見おろしていると、やはりこの一軒一軒を多くの人たちがコツコツたてていったのだ、とあらためて人間の努力を考えなおすことがあります。大きな辞書につまっている何十万もの単語をまえにして、わたしたちはこれとおなじような感じにうたれ、名もしれない無数の人間の協力のとうとさを思

わずにはいられません。

言語につねに冷徹なまなざしを向けてこられた先生は、その言語をつくりあげてきた人間への強い共感をお持ちでした。この若き宮島青年の文章には、そうしたお気持ちが素直に表れていると思います。宮島達夫先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

(2016年1月16日受付)